

琉球大学学術リポジトリ

日本語の談話におけるコミュニケーション機能 「わかる」と「知る」を中心に

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学留学生センター 公開日: 2012-04-17 キーワード (Ja): わかる, 知る, 談話分析, コミュニケーション機能 キーワード (En): waku, shiru, discourse analysis, communicational functions 作成者: 葦原, 恭子, Ashihara, Kyoko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/24114

日本語の談話におけるコミュニケーション機能 —「わかる」と「知る」を中心に—

葦原 恭子

要 旨

日本語教育の初級段階の会話指導においては、各指導項目である文型や文を個々に取り出し、文法的意味・機能の観点からのみ明らかにして指導するきらいがある。しかし、実際のコミュニケーションに即した会話指導ということを考慮するなら、学習者は文法的意味・機能や文の構造のみならず、実際の場面や状況の中で文や文型がどのように使われるのか、つまり「談話」の流れの中で、どのような「表現意図」を持って発話されるのかを習得する必要がある。本稿は、初級段階で学習する動詞の中から、共に認識行為を表す類義語であり、日本語学習者には使い分けが困難であると思われる「わかる」と「知る」を取り上げる。そして、「日本語の談話におけるコミュニケーション機能分類」仮説の分類に基づいて、日常生活の中で実際に交わされた談話に見られる「わかる」と「知る」の表現意図を分析し、発話機能による分類を試みた。この結果は、より効果的な会話指導を考える上での一助となるものである。

【キーワード】 わかる 知る 談話分析 コミュニケーション機能

1. はじめに

外国人に対する日本語教育の現場では、稲垣他(1991)も指摘するように、初級段階の会話指導において、各指導項目である文型や文を個々に取り出し、それを文法的意味・機能の観点からのみ明らかにして指導するきらいがある。しかし、実際のコミュニケーションに即した会話指導ということを考慮するなら、学習者は文法的意味・機能や文の構造のみならず、実際の場面や状況の中で文がどのように使われるのか、つまり「談話」の流れの中で、どのような「表現意図」を持って発話されるのかを習得する必要がある。本稿では、初級段階で学習する動詞の中から「わかる」と「知る」を取り上げる。

ここで、初級日本語の主教材として幅広く使用されている『みんなの日本語Ⅰ』に見られる「わかる」と「知る」の例を見てみよう。まず、「わかる」であるが、「Ⅱ. 教室の指示のことば」として次のような例が提示されている。

(1) わかりますか。(…はい。わかります/いいえ、わかりません)

第6課の「会話」には、次のようなやりとりが紹介されている。

(2) 佐藤：大阪城公園で会いましょう。

ミラー：わかりました

また、第9課の例文では次のような例が提示されている。

(3) 田中さんはインドネシア語がわかりますか…いいえ、全然わかりません。

「知る」に関しては、第15課の練習Cで次のような会話が提示されているのみである。

(4) A：山田さんの電話番号を知っていますか。

B：ええ。

A：すみませんが、教えてください。

「わかる」と「知る」は、共に認識行為を表す類義語であり、日本語学習者には使い分けが困難であると思われる項目の一つであるが、初級段階で十分な学習がされているとは言いがたい。葦原(2010)は、日常生活の中で収集された実際に交わされた談話に見られる「わかる」と「知る」の分析を通して、その使い分けについて考察し、二つの動詞が置き換え可能な場合と不可能な場合の使い分け、及びその意味分類を明らかにした。そこで、本稿では、この意味分類を踏まえつつ、その表現意図に注目し、この二つの動詞が帯びている発話機能を、分析によって明らかにしていくことにより、文レベルにとどまらず、談話レベルでのコミュニケーションで使うことができることを目指した練習方法の構築への第一歩とする。

2. 先行研究

2.1. 談話に関する先行研究

「談話」について、宮地(1979)は、文章(談話)を「ひとまとまりの意味を持つ確定しにくい直観的な単位体である」としている。池上(1983)は、「文のさらに上に、ある種の制約が満たされることによって成り立つ構造的な単位がある」と述べている。さらに、田中(1983)は、談話について、「われわれが常識的に見て談話表現と呼ぶ言語表現のまとまり」と表現しており、「実践的な見地からしても、そうした単位を無視することはできない」としている。南(1983)もまた、「ひとまとまりになっている言語表現を談話と呼び、日常の言語資料は談話の形をとっており、コミュニケーションを目的として、ことばを使うときには、単位は談話である」と述べている。本稿では、「談話」とは「ある一定のコミュニケーション機能を持ったひとまとまりの言語表現

となっているもの」と定義し、「わかる」と「知る」が談話において、どのような表現意図を持って使用されているのか分析する。

2.2. 機能に関する先行研究

南（1983）は、談話の単位をみつける手がかりとして、「コミュニケーションの機能」を挙げており、その他に、表現された形そのもの、参加者、話題、使用言語、媒体、表現態度（フリ）、全体的構造の7つの要素があるとした。そして、談話の単位と言語コミュニケーションの機能の関係について、「あるまとまった言語表現は、ある一定の言語的コミュニケーションの機能を持っていると仮定することができる」としており、機能を、「ひとり、あいさつ、しらせ・用談、おしゃべり、遊び、教え・さしず、けんか、思考、不明」の9種類に分類した。宮地（1979）は、国立国語研究所（1960）がコミュニケーションの機能を「表現意図」として分類したものを基に、ABCの3類12種に再分類している。A. 確定・不確定の判断・叙述に関する文表現、B. 質問・すすめ・たのみなど、要求に関する文表現、C. その他の文表現である。国立国語研究所（1987）は、構造と機能の面から教材分析・記述を行い、具体的に「発話機能」の範疇群を提示し「文末の表現意図による分類」、次に「場面を形成する要因による分類」を行っている。ヤーコブソン（1973）は、ビューラー（1934）が言語音声の基本的機能として挙げた「1. 表出、2. 呼びかけ、3. 叙述」の3種の機能を「伝統的なモデル」とした上で言語行動の成立要素を6種とし、それぞれに対応する機能を挙げている。「1. 送り手本位の機能（心情的機能）、2. 受け手本位の機能（動能的機能）、3. 内容事物本位の機能（間説的機能）、4. 発話形式本位の機能（詩的機能）、5. 言語体系本位の機能（メタ言語的機能）、6. 接触本位の機能（交話的機能）」である。時枝（1955）は、言語の機能を「1. 実用的（手段的）機能、2. 社交的機能、3. 鑑賞的機能」の3つに分類した。林（1979）は、時枝の機能3分類説を「最も推服するに足る」分類であるとし、これに「多くの人に受け入れられている」とするヤーコブソンの6分類説を組み合わせ、（メタ言語機能を除く）記述の枠組みを構築した。「1. 実用機能（1a. 内容伝達1b. 働きかけ1c. 自己表出）2. 社交機能（2a. 接触・融和2b. 儀礼）3. 鑑賞機能（3a. 内容本位3b. 言語本位）」である。ハリディ（1985）は、発話機能を「言語コミュニケーションがもつ対人的機能の重要な要素である」としており、「話すことによるすべての行為は相互交流、すなわち、一種の交換である」と主張した。発話機能として「1. 観念的機能、2. 対人的機能、3. テクスト的機能」を言語の3つの側面ととらえている。葦原・内海（1987）は、林

(1979) とハリディ (1985) の枠組みを参考に、「日本語の談話におけるコミュニケーション機能分類仮説」をたて、初級文型である「～たい」と「～てみる」の談話における機能分析を行った。

本稿では、この分類仮説に基づいて、談話に見られる、「わかる」と「知る」の機能分析を試みる。これにより、「わかる」と「知る」の持つ発話機能の一端が明らかとなり、葦原・内海 (1987) による分類仮説の信頼性を測ることもなると思われる。

3. 日本語の談話におけるコミュニケーション機能分類

葦原・内海 (1987) は、日本語の談話におけるコミュニケーション機能分類を構築するにあたり、まず、発話機能が「何のために働いているか」によって、以下の4つの機能規定の基準を挙げた。「1. 話し手及び聞き手, 2. 話し手と聞き手のつながり, 3. 発話内容そのもの, 4. かたまりとしての談話の全体」である。そして、これらの基準が規定する機能として、「I. 実現機能, II. 社交機能, III. 鑑賞機能, IV. 談話構成機能」をマクロ機能として挙げている。談話のコミュニケーションにおける機能分類一覧表は表1の通りである。

表1 日本語の談話におけるコミュニケーション機能分類一覧表 (葦原・内海1987)

機能		機能規定の基準
実現機能	働きかけ	勧誘, 行動要求, 許可要求, 申し出, 合図
	内容伝達	説明, 報告, 意見
	自己表出	ひとりごと, 感動詞
	応答	ことわり, 説明, アドバイス, 申し出, 勧誘, いいわけ, 同意, 非難
社交機能	人間関係を開く・維持する	調子合わせ, 間つなぎ, 挨拶的表現, 決まり文句的表現, 冗談, 冷やかす, 皮肉
	儀礼	挨拶, 口上
鑑賞機能		詩, スピーチ, 劇, 俳句
談話構成機能		起こし 結び
		話し手・聞き手
		話し手と聞き手の社会的つながり
		発話内容
		かたまりとしての談話

次節から、それぞれのマクロ機能とその下位機能の解説を示す。

3.1. 実現機能

実現機能は、話し手、または聞き手に注目し、話し手または聞き手が何らかを実行または表現することによって、話し手、または聞き手の中に、その効果を生む。下位分類には、1. 働きかけ、2. 内容伝達、3. 自己表出、4. 応答の4つがあり、これらは、実現機能が働く際に、話し手が聞き手にどの程度の意識を持って働きかけているか、つまり、聞き手から何らかの結果が形となって帰って来ることを期待しているか否か、また、聞き手から働きかけたのかどうかという点から分類されている。

3.1.1. 働きかけ

話し手が聞き手に働きかけ、その結果としての効果を積極的に求めているものである。下位分類として、勧誘、行動要求、許可要求、申し出、合図の5つが挙げられる。

3.1.2. 内容伝達

話し手が聞き手に、話し手の経験、意見、または何かについての説明など、観念化したものを発表する形で伝えるもので、話し手が伝達するということに主眼点をおき、伝達したことを聞き手が受容するという以上以上の効果を積極的に求めてはいないと考えられるものである。下位分類は、説明、報告、意見である。

3.1.3. 自己表出

話し手が、自分の表したことを聞き手が受容するかどうか、ほとんど考慮せずに、自分の中にある感情や経験内容といったものを表出したものである。聞き手に対する意識が薄くなると、その表れ方は感動詞に近くなっていくと思われる。意識の程度については、前後の文脈、イントネーションによって測ることができる。下位分類として、ひとりごと、感動詞がある。

3.1.4. 応答

聞き手が話し手からの働きかけに対して、積極的に効果を意識して応答したものである。働きかけに対応する場合も見られる。下位分類として、ことわり、説明、アドバイス、申し出、勧誘、いいわけ、同意、非難がある。

3.2. 社交機能

南 (1974) は、「われわれのことばが一般のコミュニケーションにおいてはたしている役割は、単に相手にものごとを伝えるだけではない。人と人との間の社会的接触を作る働きもある」としているが、この社交機能は、話し手と聞き手の間にある社会的つながりに主眼点をおいた時、見出される。実現機能と異なる点は、話し手または聞き手が注目しているのは、話し手と聞き手のつながりであり、求める効果もそこにある。下位分類として、社会的人間関係を開く・維持すると、儀礼の2つが挙げられる。

3.2.1. 社会的人間関係を開く・維持する

話し手が聞き手との間に新しくつながりを持つようとして発話する場合、同じく、聞き手が応答する場合、これを「関係を開く」とする。また、話し手と聞き手が既に存在するつながりを保つために発話、応答するものを「関係を維持する」とする。この下位分類には、調子あわせ、間つなぎ、挨拶的表現、決まり文句的表現、冗談、冷やか、皮肉がある。

3.2.2. 儀礼

いわゆる慣用句、決まり文句、挨拶などを指す。

3.3. 鑑賞機能

話し手、または聞き手の発話そのものに注目し、その形、内容を文字通り鑑賞するというときに働くものである。これには、書きことば、または書きことばを読み上げる形のもが含まれる。例えば、詩、スピーチ、俳句、批評などである。本稿における分析では、実際に発話された談話のみを対象としており、鑑賞機能にあたる用例は採集していない。

3.4. 談話構成機能

田中 (1983) は、ハリディ (1985) のテクスト的機能は、林 (1983) の「文の姿勢」に相当するとしている。林 (1983) は、すべての文は、文章の中に位置づぐための姿勢をもっているとし、タイプとして、始発型、承前型、転換型、自由型があり。下位分類として、起こし、結び、の二つがある。本稿では、談話構成機能の用例は採集していない。

4. 談話にみられる「わかる」と「知る」の用例

4.1. 用例収集法

本稿では、「わかる」と「知る」の談話における機能を分析するにあたり、次のような3つのルールに基づいて用例を収集した。1) 日常生活の中で発話された談話で、「わかる」もしくは「知る」が含まれたものを集める。動詞の形式については、現在形、過去形、活用したもの、名詞修飾形なども可とし、制限は設けないものとする。2) 発話は収集者本人が発話したもの、または本人が実際に見聞きしたもののみとし、架空の発話は作らない。これは、「わかる」と「知る」が実際の言語活動において、どのように現れるかを見るためである。3) 収集した発話は、発話ごとに情報カードに記載する。記載のポイントは、収集日、発話者、発話された状況、発話後の状況とする。なお、用例の収集者は、筆者が2005年から2008年にかけて、東京都内及び東京近郊にある民間の日本語教師養成機関3か所で、類義語分析の方法論を指導した際、その講義を受講していた養成講座受講生である。

談話の区切りの手がかりは、林（1983）によると、非言語伝達、身振り、目の動き、顔色、うなずくなど、ある姿勢を帯びた言語表現と、その発話の結果現れる行為・効果があるとされ、コミュニケーションは必ず何らかの目的を持ち、その目的は言語によって伝えられるが、その結果は必ずしも言語によって表されるわけではないという。本稿の用例収集に当たっては、南（1983）のいう「常識的に見て談話表現と呼ぶ言語表現のまとめり」を特定するために、談話において何らかの表現意図が達成されたことを確認すること、そして、その結果を情報カードに詳細に記載することとした。

4.2. 収集された用例の概要

前節で述べた用例収集法により収集された用例の概要は、表2の通りである。

表2 用例の概要

収集時期	2005年2月～2008年12月	収集地域	東京都内及び東京近郊
用例総数	446例		
発話場所	自宅（124例） 職場（97例） 学校（70例） 居酒屋・レストラン（45例） 公共交通機関（37例） テレビ・映画（27例） 電話（23例） 通りで（5例） 病院・美容院・ショッピングセンター（11例） 空港（3例） メール（4例）		

5. 「わかる」と「知る」の用例のコミュニケーション機能分類

5.1. 実現機能を帯びている用例

収集された446の用例を、葦原・内海（1987）による日本語の談話におけるコミュニケーション機能分類によって分類した結果、実現機能を帯びているとして分類された「わかる」の使用例は、表3の通り、168例、「知る」の使用例が118例で、合計286例であった。それぞれの用例は、出現した形によって、肯定形と否定形に分けて分析を試みた。内訳は表3の通りである。これは、機能によっては、肯定形もしくは否定形のみ採集されたものもあったためである。本稿では、用例が収集された機能についてのみ分析を試みる。

表3 用例のコミュニケーション機能分類（実現機能）

機能		わかる			知る			
		肯定形	否定形	小計	肯定形	否定形	小計	
I. 実現 機能	働きかけ	勧誘	0	0	0	3	0	3
		行動要求	15	12	27	22	9	31
		許可要求	0	0	0	0	0	0
		申し出	1	2	3	0	0	0
		合図	0	0	0	0	0	0
	内容伝達	説明	4	2	7	11	1	13
		報告	2	1	3	8	0	8
		意見	2	2	4	1	0	1
	自己表出	ひとりごと	1	2	3	0	0	0
		感動詞	9	0	9	1	8	8
	応答	ことわり	1	13	14	0	2	2
		説明	8	13	21	6	5	11
		アドバイス	1	0	0	1	0	0
		申し出	0	0	0	0	0	0
		勧誘	0	0	0	0	0	0
		言いわけ	7	27	34	4	14	18
		同意	30	0	30	6	0	6
非難	2	11	13	2	14	18		
小計		83	85	168	65	53	118	

5.1.1. 働きかけ<勧誘>

実現機能のうち、「働きかけ」として分類された用例は、「わかる」が30例、「知る」が34例であった。そのうち、「勧誘」の機能を帯びていたものは3例で、「わかる」の用例は採集されず、すべて「知る」の肯定形であった。以下のような例である。

(5) <自宅で・姉と妹の会話>

A：ねえ、横浜アンパンマン子供ミュージアムって知ってる？

B：なにそれ、知らない。

A：なんか、MM（施設名）にできるらしいよ。見てこれ。

超行きたくない？〇〇（姪の名前）借りていこうよ。

収集された3例はすべて、話し手が勧誘したいものを持っており、それを聞き手が知っているか確かめてから勧誘するという例であった。これらは、単なる会話のきっかけづくりではなく、話しかける前から勧誘することを決めていたと思われることから、社交機能ではなく、実現機能として分類した。

5.1.2. 働きかけ<行動要求>

働きかけのうち、話し手が聞き手になんらかの行動を要求していると思われる「行動要求」の用例は、「わかる」が27例、「知る」が31例であった。

「わかる」の27例のうち、肯定形を用いて行動要求をしているものは15例見られた。

(6) <職場で・アルバイトと社員の会話>

社員：さっき、山田さんからかかってきた電話取ったのだから、わかる？

アルバイト：わかりませーん。

他例もすべて「行き方、わかります？」など、話し手が必要としている情報を与えるよう要求しているものであった。これらはすべて「知る」で置き換えることができたが、否定形を用いている12例は「知る」で置き換えられなかった。

(7) <職場で・上司と部下の会話>

上司：〇〇さん、これ……。

部下：え？あ、インクですか？

上司：うん、わかんないんだよ。これ。

部下：あ、はい、ちょっと待っててください。今、取り替えます。

これらの特徴は、すべて、話し手が「～がわからない」と聞き手に伝えた時点で、聞き手が、文脈から要求されている行動内容を把握し、即座に求められている行動に

着手していることである。肯定形の例とは異なり、単に情報を求めるのではなく、「インクを取り替える」「書類を記入する」「電源を入れる」など、具体的な行動を要求していた。

「知る」31例のうち、肯定形を用いて、行動を要求しているものは22例であった。

(8) <電話で・友人AとBの会話>

A：今度みんなで集まろうと思ってるんだけど、Cさんのメールアドレス知ってる？

B：うん。わかるよ。えーと…（携帯を出す）。

A：ありがとう。日時とかはメールで連絡するから。

これらはすべて「～を知っていますか」という質問によって情報を与えることを要求しており「わかる」で置き換えることができた。また、否定形を用いている9例は、物の所在を教えてほしいという行動要求であった。

5.1.3. 働きかけ<申し出>

「申し出」の例は、話し手が、聞き手がわからないことを教えるという態度を示すものであった。

(9) <職場で・教育担当者Aと従業員Bの会話>

A：コマ違いってわかりますか。まだ入ったばかりだから、わからないかな？

B：わかります。教えていただきました。

5.1.4. 内容伝達<説明><報告><意見>

実現機能のうち、「内容伝達」として分類された用例は、「わかる」が14例、「知る」が22例であった。そのうち、「説明」の機能を帯びているとして分類されたものは、「わかる」が7例で、「知る」が13例であった。「わかる」の肯定形の例は次のような例である。

(10) <電話で・携帯電話を拾った人Aとその持ち主Bの会話>

A：じゃ、とりに来ていただけますか。奥さんの妹さんと同級生の家です。

わかりますか。「なかだなです」

B：あ、知ってます。

これらは、内容を伝達しつつ、「わかりますか」と確認を繰り返すという例で、「知る」で置き換えることはできなかった。否定形の例は、話し手が、自分がわからない

ことは何かを伝達するものであった。

内容伝達の「報告」に分類した例は、「わかる」が3例、「知る」が8例であった。「わかる」の例は、肯定形を用いて、自分がわかったことの報告をしているものと、否定形を用いて、わからないことは何かを報告しているものに分けられた。また、「知る」については、肯定形のみ採集されたが、これらは、「（トピックについて）知っていますか」と質問してから、自分が知りえた情報を報告するという例であった。次のような例である。これらは「わかる」で置き換えることはできなかった。

(11) <喫茶店で・クラスメートAとBの会話>

A：ねえねえ、知ってる？あの二人，付き合ってるんだって。

B：あの二人って？

A：佐々木さんと石川さん。

B：マジで？

内容伝達の中で、自分の意見を伝達していると思われる例は、「わかる」が4例、「知る」が1例であった。

5.1.5. 自己表出

自己表出の機能として分類された例は、「わかる」が12例、「知る」が8例であった。これらは、聞き手に対する意識の程度によって、「ひとりごと」と「感動詞」に分類した。

「ひとりごと」に分類された「わかる」の3例は、「わかるかな」「わかんないな」「全然わかんないな」という3つのパターンが見られた。また、「感動詞」に分類された「わかる」は、すべて話し手が何かを発見して、「わかった！」と言うものであった。

(12) <家で・クイズ番組を見ている妻と夫の会話>

妻：全然わかんないんだけど。

夫：うーん、あ、わかった！

妻：え？何。教えてよ。

「知る」の「感動詞」に分類された例はすべて否定形の過去形であり、「わかる」で置き換えることはできなかった。

(13) <レストランで・友人同士の会話>

(別の友人の結婚が決まったことを聞いて)

A：知らなかったー。あー、情報遅いな～私。

B : んなことないよ。私だって、知ったのつい最近だもん。

5.1.6. 応答<ことわり>

応答の「ことわり」に分類された例は、「わかる」が14例と「知る」が2例であった。これらは、話し手から行動要求があった時に、「わからない」「知らない」と否定形で答え、行動を断るものであるが、1例のみ肯定形のものがあつた。次のような例である。

(14) <喫茶店で・恋人AとBの会話>

A : パンダの白黒が反転した世界で目覚めた人の気持ちってわかる？

B : どういうこと？

A : こんな会話をしてもあなたをひきとめて話していたい私の気持ちがわかる？

B : わかるか！

5.1.7. 応答<説明>

応答「説明」の例は、肯定形は「自分は何がわかったか」「何を知ったか」を説明するというもので、否定形は「状況が把握できていない」ということを説明する例が見られた。

(15) <電話で・姉と妹の会話>

姉 : 電車は動いてるのかい？

妹 : まだ動いてないよ。いつ動くのかよくわからない。ずっと電車の中だよ。

5.1.8. 応答<言いわけ>

実現機能に分類された「わかる」の中で、34例と最も多く見られたのが、「いいわけ」であつた。これは「知る」についても18例見られた。これらは「わかっている(知っていた)が～しなかつた」「わからなかつた(知らなかつた)ので～しなかつた」と否定形を用いて言いわけをするものであつた。その中で「新規の情報」を対象としているものは「知る」のみ使用可能であつた。

(16) <電話で・友人AとBの会話>

A : もしもし、久しぶり。ずっと連絡してなくてごめんよ。

B : いいえー、こっちも色々忙しくてさ。先週、実はちょっと入院してたんだよね。

A：え！そうだったの？全然知らなかったよー。ごめんね。もう大丈夫なの？
肯定形を用いて「わかってるよ！（でも行動に移していない）」という例も1例あった。

5.1.9. 応答<同意>

応答の「同意」に分類された「わかる」は肯定形のみ30例、「知る」も肯定形のみ6例見られた。「わかる」の例は、初級の教科書で一般的に取り上げられている「了解しました」の代わりに用いる「わかりました」であった。これらは「知る」で置き換えることはできなかった。また、話し手による情報提供の求めに応じて同意している「わかる」は「知る」で置き換えられた。

5.1.10. 応答<非難>

非難に分類された「わかる」13例のうち11例は否定形で「わかってないな」という表現であった。次のような例である。これらは「知る」で置き換えることはできなかった。

(17) <家で・妻と夫がクイズ番組を見ているときの会話>

妻：え？何。（クイズの答えを）教えてよ。

夫：もうちょい，考えてみなよ。考えるのが楽しいのに。わかってないなあ。

「知る」18例のうち14例は否定形であるが，これは，強く非難し，相手を突き放すような話し方をしている例であった。これらは「わかる」で置き換えることはできなかった。

(18) <空港で・恋人AとBの会話>

A：あー，（リュックを）機内に置いてきちゃった。どうして言ってくれなかったの。

B：知らないよ！いつも人のせいにしないでよ。

5.2. 社交機能を帯びている用例

収集された446の用例のうち，実現機能を帯びているものを除くと，160例となったが，これらすべては，社交機能を帯びているとして分類された。その中で「わかる」の使用例は，表4の通り，89例，「知る」の使用例が71例であった。それぞれの用例が出現した形の内訳は表4の通りである。

表4 用例のコミュニケーション機能分類 (社交機能)

機能		わかる			知る			
		肯定形	否定形	小計	肯定形	否定形	小計	
II. 社交 機能	社会的 人間 関係を 開く 維持する	調子合わせ	42	31	73	25	21	46
		間つなぎ	7	5	12	21	3	24
		あいさつ	0	0	0	0	0	0
		決まり文句	0	1	1	0	0	0
		冗談	3	0	3	0	1	1
		冷やかし	0	0	0	0	0	0
		皮肉	0	0	0	0	0	0
	小計	52	37	89	46	25	71	

5.2.1. 調子合わせ

社交機能の「調子合わせ」に分類された「わかる」は肯定形42例、否定形31例であった。肯定形は、聞き手が、話し手の気持ちや感覚を理解したことを表すものであり、否定形は、話し手も聞き手も「わからない」ものが一致しているとして共鳴する場合であった。

(19) <電車で・同僚AとBの会話>

A : 何かを勉強するってやっぱりいいですね。

B : そうそう、何か脳が活性化するっていうか……。

A : あー、わかります。わかります。

「知る」は、肯定形が25例、否定形が21例であった。話し手が提示した新規の情報を聞き手が知らなかったと伝えることによって調子を合わせるものが11例見られた。

(20) <教室で・クラスメートAとBの会話>

A : きのう、JR大阪駅で、構内の電気が4時間停まったそうですよ。

B : へー、それは全然知らなかったな～。

このような例以外の35例は、すべて「わかる」で置き換えることができた。

5.2.2. 間つなぎ

「間つなぎ」に分類された「わかる」12例と「知る」24例は、いずれも話し手が聞き手との会話の沈黙を埋めるために、あるトピックについて「～わかる?」「～知っている?」と話をつないでいる例である。これらの例は「行動要求」とは異なり、話し手が積極的に情報を求めているわけではないため、会話は長続きせず、内容も発展せず、すぐ、次の話題に移るのが特徴である。

(21) <居酒屋で・友人AとBの会話>

(前の話題とのつながりなく話し始める)

A: ミスコリアのさあ、善、真、美ってあんじゃん。順番知ってる?

B: 知らなーい。(このあと、すぐ次の話題に移るが、Aは気にしない)

5.2.3. 決まり文句的表現

「決まり文句的表現」の例は1例のみ採集された。次のような例である。

(22) <電車で・女子高校生AとBの会話>

A: そうそう。先生に「だれを覚えればいいのか?」って聞いたら、この辺って。

B: うち、ヨセフしか書いてない。先生ヨセフしか書かなかったしー。ムカつく。

あいつ、マジ、意味わかんねえ。

この例に見られる「意味(が)わからない」という表現は、若者を中心に使用例が見られるが、いずれの場合も、自分が不快な気分を吐露する際に用いられ、状況が把握できない、理由がわからないという場合だけでなく、単に腹を立てたことを示す場合に用いられるようである。

この他、冗談として「わかる」「知る」を用いている場合は、「冗談」に分類した。

6. まとめ

本稿では、日常生活の中で実際に交わされた談話における「わかる」と「知る」のコミュニケーション機能の分類を試みた。「わかる」については、社交機能の「調子合わせ」が最も多く採集され、次いで実現機能の「応答いいわけ」「応答同意」「行動要求」が多かった。「知る」については、社交機能の「調子合わせ」、次いで実現機能の「行動要求」の例が多く採集された。

ここで、冒頭で示した「みんなの日本語 I」に見られる「わかる」と「知る」を本稿で用いた方法で機能分類してみよう。

(1) わかりますか。(…はい。わかります/いいえ、わかりません)

(3) 田中さんはインドネシア語がわかりますか…いいえ、全然わかりません。

これらは「実現機能」の「行動要求」に当たると思われるが、収集された、実際に交わされた談話では、このように聞き手に直接、知識の有無を聞く例は採集されなかった。

(2) 佐藤：大阪城公園で会いましょう。

ミラー：わかりました

これは、本稿では30例採集されていた実現機能の「応答同意」に当たる。実際に収集された談話では、257例中89例の「社交機能」にあたる例が最も多く収集され、次いで「言いわけ」であり「応答同意」は3番目に多かった。「みんなの日本語」では、「言いわけ」の例や社交機能の例は、一切紹介されていない。

(4) A：山田さんの電話番号を知っていますか。

B：ええ。

A：すみませんが、教えてください。

これは、実現機能の「行動要求」に当たるが、本稿で採集した例では、「教えてください」まで発話した例は見られなかった。「わかる」と「知る」については、中級段階に進んだ学習者にとっても、その使い分けは容易とは言えず、数々の誤用が見られるものの一つである。本稿による分析結果から見ると、その一因として、これらの動詞の談話における機能が教室の中でほとんど考慮されていないことが挙げられると思われる。

7. おわりに

本稿では、日本語教育における実際のコミュニケーションに即した会話指導を目指した練習方法の構築への第一歩とすべく、コミュニケーション機能分類を試みた。その結果、収集された実際に発話された談話におけるコミュニケーション機能と、初級レベルの日本語教育で取り上げられている機能に乖離が見られることは明らかとなった。しかし、それぞれの機能に分類された「わかる」と「知る」のより深い分析が必要である。また、葦原・内海(1987)による機能分類一覧表によって分類を試みたが、この一覧表はあくまでも分類仮説であり、より幅広く、より多くの用例を収集し、分析を続け、一覧表の修正を試み、信頼性を高めることが必要である。これらの点については、今後の課題として、別稿に譲ることとする。

参考文献

- 葦原恭子・内海由美子（1987）「談話における文型の機能——一覧表作成の第一歩として——」国立国語研究所日本語教育長期専門研修修了論文
- 葦原恭子（2010）「日常会話における『わかる』と『知る』の使い分け——談話の分析を通して——」『留学生教育第7号』琉球大学留学生センター紀要
- 稲垣滋子他（1991）「第3章シラバス・デザイン」『日本語教育機関におけるコース・デザイン』日本語教育学会編 凡人社 154-197
- 池上嘉彦（1983）「テキストとテキストの構造」『談話の研究と教育 I』国立国語研究所 7-42
- 国立国語研究所（1960）『話しことばの文型（1）——対話資料による研究——』秀英出版
- 国立国語研究所（1987）『談話行動の諸相』国立国語研究所報告92 三省堂
- 田中望（1983）「日本語教育と談話の研究」『談話の研究と教育 I』国立国語研究所 113-133
- 時枝誠記（1955）『国語学言論続篇』岩波書店 93-118
- 西原鈴子（1997）「談話分析——ことばはどのように使われているか——」『日本語教育通信29号』国際交流基金
- 服部四郎（1978）『ローマン・ヤーコブソン選集 II 言語と言語科学』大修館書店 64, 141, 188
- 林四郎（1979）「言語行動概観」『講座言語 言語と行動』大修館書店 69-78
- 林四郎（1983）「日本語の文の形と姿勢」『談話の研究と教育 I』国立国語研究所 43-62
- 南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店 20-31, 69-103
- 南不二男（1983）「談話の単位」『談話の研究と教育 I』国立国語研究所 91-112
- 南不二男他（1983）「談話の研究と教育の必要性」『談話の研究と教育 I』国立国語研究所 1-5
- 宮地裕（1979）『新版文論』明治書院 53-54, 124-143
- Halliday, M. A. K. (1985) *Language, context, and text: Aspects of language in a social-semiotic perspective* 笈壽雄訳『機能文法のすすめ』大修館書店 25-46
- Buhler, K. (1934) *Sprachtheorie* 脇坂豊他訳（1983）『言語理論——言語の叙述機能』クロノス
- Roman Jakobson (1973) *Essais de Linguistique general* 川本茂雄監修（1973）『一般言語学』みすず書房 183-196

（琉球大学留学生センター）

A Discourse Analysis to Classify Communicational Functions of Japanese Verbs Focusing on “*wakaru*” and “*shiru*”

ASHIHARA Kyoko

Keywords: *wakaru*, *shiru*, discourse analysis, communicational functions

Abstract

In Japanese language conversational classes for beginners', it has been a common method to extract each language structure, sentence, or verb, and teach only their grammatical meanings and functions to learners. It is necessary, however, for learners to know the communicational functions of language structures, sentences, and verbs in actual daily situations to learn authentic communications. The purpose of this paper is to classify the communicational functions of “*wakaru*” and “*shiru*” through analyzing actual discourse data collected in daily conversations. The collected data for this paper are up to 446, and they are classified into two groups according to their macro functions, and sorted according to their micro functions. The classification and the analysis done in this paper should be useful and would be the first step for Japanese language instructors to make the conversational classes more authentic and practical.

(University of the Ryukyus)